民生委員児童委員に向けた

News letter　M I N S E I

Vol. 13　2024.2

農業と民生委員活動を通して、地域とつながる

農業をしながら民生委員を7期続ける川崎市高津区橘第１地区民児協会長の小宮秀樹さん。小学校のPTA会長を務めていた時、町会長から「民生委員をやってみないか」と声をかけられたことをきっかけに41歳で民生委員になりました。

民生委員のことはよく分からなかったけれど、「農家なので地域と繋がっていることも多く、生まれ育った地域の役に立てるなら」という気持ちで引き受けたそうですが、小宮さんの畑では通年、育てた野菜を直売しているため、休みがほとんどなく、委嘱当時は、会合に出るので精一杯、研修も満足に受けられなかったそうです。

しかしながら、一般の会社勤めと異なり、仕事の時間が平日9時から17時までと決まっていないため、農業の時間を調整したり、家族で役割分担をし、協力を得ながら（90歳のお母さんは今も畑に出て収獲をしてくれる、直売の売り子を奥さんに任せる等）、無理のない範囲で活動を続けてきました。

「班活動」を導入！

小宮さんは、4期目から橘第1地区民児協の会長になりました。橘第1地区民児協では、小宮さんのように働いている方が多く、また、働き方も多様化（パートの方、夜勤の方、複数の仕事をしている方等）していると言います。

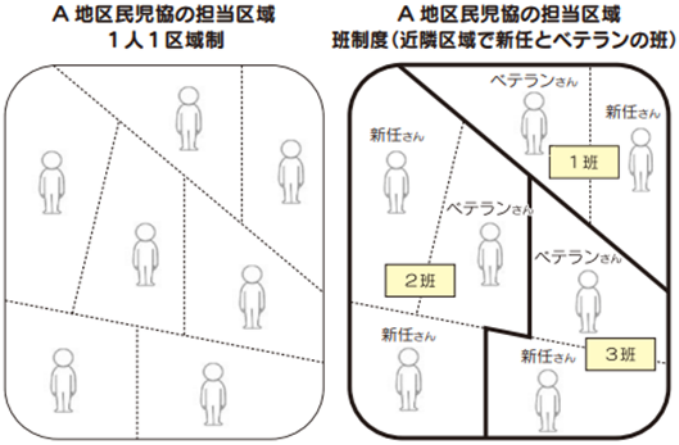
このような状況の中、令和5年1月より、近隣区域を担当している民生委員が3～4人で班を作り、互いにフォローし合いながら活動する「班活動」を開始しました。

元々は定例会に欠席した人を近隣区域の人がフォローする形でしたが、令和4年の一斉改選で1期目の民生委員が9名、2期目の民生委員が12名と、32名の民生委員のうち半数以上が期の浅い民生委員になったことをきっかけに、「期の浅い民生委員が普段の困りごと、気になることを聞きたいと思った時、1か月先の定例会まで抱え込まないよう、民児協としてのサポート体制が必要」と考え、班活動の導入を定例会で提案し、みなさんの賛成を得て始まりました。

班の構成は、近隣区域ごとに新任委員とベテラン委員を組み合わせ、一緒に訪問してもらったり、ちょっとした相談をしたり、お互いに支え合う関係性が築けるよう工夫しました。

小宮さんは、若い時から農業仲間とたくさん話し合ってきた経験から、仲間で話し合いながら活動をすることの大切さを知っています。その上で、様々な状況にある民生委員が無理なく活動できるように、何かを始める時や困難な時は役員だけで決めるのではなく、なるべくみんなと共有しながら、進めていくことを心がけています。

「班活動」のイメージ



小宮さんの畑で育った野菜たち

お互いが気にかけ合い、話し合うことを大事に

令和4年の一斉改選では、高津区民児協の会長に就任した小宮さんですが、「自分にリーダーの素質があると思わない。会長としてみんなを引っ張ったり、助けることも必要だけれども、みんなから教えていただくことが多い」と言います。

班活動の導入をきっかけに、多様な背景や想いのある民生委員が、「それぞれの個性を生かしながら、その人なりに活躍できる活動内容や民児協運営を仲間とともに考えていきたい」と今後に向けた想いを優しい眼差しで語ってくれました。

小宮さんが思う民生委員をやっててよかった！

地域の色々な方と出会い、お話をする中で、自分では体験できないことを聴かせていただき、そういう世界があると知ることができると、人生が豊かになる。「話してくれてありがとう」の気持ち。自分が活動したことで相手が変わることはほとんどないけれど、相談してよかったと思ってもらえたらそれでいい。教えていただいたことが次の自分の行動につながる。

＊神奈川県社協 民生委員児童委員部会は、県・政令市の民児協が参画する協議体です。様々な地域性やきめ細やかな幅広い委員活動から得る多様な情報や知恵を集結し、県政令市の枠を越えて、交流、研修情報収集、意見具申など、スケールメリットを活かした協働事業の運営を行っています。

＊このニュースレターは、神奈川県内の民生委員児童委員向けに委員が抱えている共通の課題や異なる地域特性を生かした活動事例に関する情報を発信するために、不定期に発行します。

HP：神奈川県社協民生委員児童委員部会

ツイッターアカウント：@kanagawa_syakyo

身近な地域で活動する民生委員児童委員のことを多くの方に知っていただけるよう、30秒のPR動画を作成しました。ぜひご覧ください！！